

問題冊子

008

令和7年度 一般選抜(後期)

小論文(和文・英文)

試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答冊子を開いてはならない。

注 意 事 項

1. 小論文では、問題冊子および解答冊子の2種類が配付される。
2. 試験開始の指示があるまで、筆記用具を持つてはならない。
3. 試験開始後、解答冊子の表紙および解答冊子の中の3か所、合計4か所の記入欄に受験番号と氏名を記入すること。
4. 試験開始後に問題冊子および解答冊子の印刷不鮮明、ページの落丁等の不備等を確認しなさい。これらがある場合には手を高く挙げて監督者に知らせること。
5. 解答は解答冊子の該当箇所に記入すること。
6. 下書きは解答冊子にある下書き用紙を利用すること。
7. どのページも切り離してはならない。
8. 質問等がある場合には手を高く挙げて監督者に知らせること。
9. 試験終了の指示があったら直ちに筆記用具を机の上に置くこと。
10. 試験終了の指示の後に受験番号、氏名の記入漏れに気づいた場合には、手を高く挙げて監督者の許可を得てから記入すること。許可なく筆記用具を持つと不正行為とみなされる。
11. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。
12. 問題冊子の問題は1～7ページである。

小 論 文

1 次の文章を読んで、後の問い(問1, 2)に答えよ。

アニメーション作品を哲学研究の対象とする際に有効な理論のひとつとして、美学者のケンダル・ウォルトンが1990年の著作『ごっこ遊びとしての模倣』(邦訳『フィクションとは何か——ごっこ遊びと芸術』)で提唱し、現代哲学や分析美学といった領域で大きな影響力をもつ「メイク・ビリーブ理論」を紹介したい。この理論は、小説、詩、漫画、映画、絵画など、様々なタイプの表象芸術を「メイク・ビリーブ(ごっこ遊び: make believe)」という観点から分析するものである。基本的なアイデアは、子どもたちが森のなかで切り株をクマに見立てる「ごっこ遊び」にある。森のなかを歩く子どもは切り株を見ると、クマに遭遇したという想像をして、足早に遠ざかる。ここで切り株はクマを表現する「小道具(prop)」となっている。そして、メイク・ビリーブ理論は、ごっこ遊びで切り株が小道具として果たす役割を、小説や詩や絵画が果たしているとみなすのである。たとえば、スーラの絵画『グランド・ジャット島』を見ると、二人連れが公園を散歩していることが分かるが、この絵画は「二人連れが公園を散歩している」という虚構的真理を生み出していると言える。もちろん、小道具が虚構的真理を生み出すのは、慣習や取り決めなどに基づく場合のみである。子どものごっこ遊びで言えば、「切り株をクマとみなそう」という取り決めを子どもたちが共有しているからこそ、ごっこ遊びが成り立つのだ。こうした取り決めをウォルトンは「生成の原理」と呼ぶ。切り株をクマとみなすという取り決めを共有する者のみが、森のなかで切り株を見つけると「A」という虚構的真理を確立することができる。絵画の場合では、表面の絵の具の集積がある世界での出来事を描いているものとみなすという生成の原理が働いている。

このように、ウォルトンのメイク・ビリーブ理論は鑑賞者の想像行為に着目してフィクションを捉える理論である。絵画や文字といった創作物の基盤となる物理的な事物を、鑑賞者が虚構的真理を生み出す小道具であるとみなすことで、様々なジャンルのフィクションを考察できる見通しが得られるのだ。

(中略)

アニメーション作品には視覚情報と聴覚情報が含まれている。製作者はこうした異なる種類の情報を組み合わせてひとつの時間的幅をもつ映像を制作するが、作品を構成する情報のひとつひとつが小道具であると考えられるだろう。実際、キャラクターの図像や声優の演技は鑑賞者がメイク・ビリーブする小道具として機能している。そして、そうした小道具に接した鑑賞者が虚構的真理を生み出すに際して依拠している生成の原理がどのようなものか、具体的に明らかにすることは興味深いことである。

たとえば、動物系キャラクター「ちいかわ」たちの日々が描かれる『ちいかわ』(ナガノ原作、2022年～)の第11話「ひとりごつ」で登場キャラクターの「ハチワレ」がギターを弾きながら歌う

シーンでは、よく見るとハチワレの手がギターに届いていない。それでも弦は震えているし、ハチワレの歌声は聴こえてくる。このシーンを見て、ハチワレが特殊な能力を駆使してギターを演奏していると受け止める鑑賞者はいないだろう。むしろ、アニメーション作品を見ることに慣れている者は、こうした描写を見ることで、「ハチワレがギターで弾き語りをしている」という虚構的真理を生み出すことができる。この虚構的真理をもたらす生成の原理とは、「キャラクターが楽器を演奏している仕草をすれば実際に演奏しているものとして想像する」であると考えられるだろう。

(「アニメーション・声優——フィクションを哲学する」稲岡大志、
『応用哲学』松田毅ほか編、昭和堂より一部改変)

問 1 空欄 A に入る適切な文を書きなさい。

問 2 下線部 A 「ハチワレ」がギターを弾きながら歌うシーン」を例に出すことで、著者はどのような事実を指摘しようとしているか。100 字以内で説明しなさい。

2 次の文章を読んで、後の問い(問1, 2)に答えよ。

変な薬

ケイ氏の家に来てきた友人が言った。

「あなたは、薬をいじるのが好きですね。いつ来ても、薬を混ぜ合わせたり熱したりしている。なにか、いいことがあるのですか」

「喜んで下さい。やっと、すごい薬ができました。これですよ

と、ケイ氏は粉の入ったビン^アを指さした。友人は、それを見ながら聞いた。

「それはけっこうでした。で、なんの薬ですか」

「カゼの薬です」

「いままでのにくらべ、どんな点がすぐれているというのですか」

「いま、ききめをごらんに入れましょう」

こう言いながら、ケイ氏は少し飲んでみせた。友人はふしぎそうだった。

「ききめを見せるといっても、あなたはカゼをひいていないではありませんか」

「いいから、見ていてごらんなさい」

まもなく、ケイ氏はセキをはじめた。友人は心配そうに、ケイ氏のひたいに手を当てた。

「熱がある。これはどうしたことです」

「さわぐことはありません。これはカゼをなおす薬ではなく、カゼひきになる薬なのです」

「ばかばかしい。あきれました。わたしにカゼをうつさないよう、願いますよ」

「それは大丈夫です。まあ、もう少しお待ち下さい」

一時間ほどたつと、ケイ氏のセキはおさまり、熱もさがった。友人はますます変な顔をした。

「もうなおったのですか」

「つまりですね。この薬を飲むと、カゼをひいたのと同じ外見になるのです。外見だけで、本人は苦しくもなく、害もありません。そして、一時間たつと、もとに戻るのです」

「妙なものを、こしらえましたね。しかし、こんな薬がなにかの役に立つのですか」

「もちろんです。ずる休みに使えます。すなわち、いやな仕事をしなくてすむというわけでしょう」

こう説明され、友人ははじめて感心した。

「なるほど、なるほど。それは便利だ。やりたくない仕事を押しつけられそうになった時は、この薬を飲めばいいのですね。すばらしい。ぜひ、わたしにわけて下さい」

「そら、ごらんなさい。ほしくなったでしょう。いいですとも、少しあげましょう」

小さなビンに入れてもらい、友人は喜んで帰っていった。

そして、ある日。こんどはケイ氏が友人の家をおとずれた。誕生日のお祝いをしたいから、ぜひ来てくれと、さそわれたのだ。

その食事の途中、ケイ氏はふいに顔をしかめて言った。

「急に腹が痛みだした。悪いけれど、これで失礼します」

友人はあわてたが、気がついたように言った。

「からかわないで下さい。わたしの家にいるのが面白くないので、早く帰りたいたいというのでしよう。ゆっくりして行って下さいよ」

「いや、本当に痛むのだ」

ケイ氏の顔は青ざめ、汗を流し、ぐったりとした。しかし、友人は信用せず、笑いながらひきとめた。

「このあいだのカゼ薬以上によくできています。いつもカゼでは怪しまれますから、たまには腹痛にもならないといけませんね」

しかし、一時間たってもケイ氏は元気にならず、苦しみかたはひどくなるばかりだ。友人はやっと、これは本物の病気かもしれないと考えて、医者を呼んだ。かけつけてきた医者は、ケイ氏の手当てをしてから言った。

「まにあってよかった。もう少しおくれたら、手おくれになるところでしたよ。しかし、なぜもっと早く連絡してくれなかったのですか」

このことがあってから、ケイ氏は変な薬を作るのをやめてしまった。

(『ボッコちゃん』星新一著、新潮文庫より一部改変)

問 1 下線部ア「すごい薬」とはどのような薬か。30字以内で説明しなさい。

問 2 下線部イ「友人はあわてたが、気がついたように言った」で、友人は何に気がついたのか。

120字以内で説明しなさい。

3 次のグラムシ (Gramsci) とバンダ (Benda) の考える知識人 (intellectuals) についての文章を読んで、後の問い(問 1 ~ 3)に答えよ。

Are intellectuals a very large or an extremely small and highly selective group of people? Two of the most famous twentieth-century descriptions of intellectuals are fundamentally opposed on that point. Antonio Gramsci, the Italian Marxist, activist, journalist and brilliant political philosopher who was imprisoned by Mussolini between 1926 and 1937, wrote in his *Prison Notebooks* that “all men are intellectuals, one could therefore say: but not all men have in society the function of intellectuals.” Gramsci’s own career shows the role he ascribed to the intellectual: a trained *¹philologist, he was both an organizer of the Italian working-class movement and, in his own journalism, one of the most consciously reflective of social analysts, whose purpose was to build not just a social movement but an entire cultural formation associated with the movement.

Those who do perform the intellectual function in society, Gramsci tries to show, can be divided into two types: first, traditional intellectuals such as teachers, priests, and administrators, who continue to do the same thing from generation to generation; and second, organic intellectuals, whom Gramsci saw as directly connected to classes or enterprises that used intellectuals to gain more power and get more control. Thus, Gramsci says about the organic intellectual, “the capitalist entrepreneur creates alongside himself the industrial technician, the specialist in political economy, the organizers of a new culture, of a new legal system, etc.” A Gramsci believed that organic intellectuals are actively involved in society, that is, they constantly struggle to change minds and expand markets; unlike teachers and priests, who seem more or less to remain in place, doing the same kind of work year in year out, organic intellectuals are always on the move, on the make.

At the other extreme there is Julien Benda’s celebrated definition of intellectuals as a tiny band of supergifted and morally talented philosopher-kings who constitute the conscience of mankind. While it is true that Benda’s essay, *The Betrayal of the Intellectuals*, has been accepted more as a blistering attack on intellectuals who abandon their calling and compromise their principles than as a systematic analysis of intellectual life, he does in fact cite a small number of names and major characteristics of those whom he considered to be real intellectuals. Socrates and Jesus are frequently mentioned, as are more recent exemplars like Spinoza, Voltaire and Ernest Renan. Real intellectuals constitute an elite, very rare creatures indeed, since what they uphold are eternal standards of truth and justice that are precisely not of this world.

(Adapted from *Representations of the Intellectuals*, by Edward W. Said, Vintage Books, 1994)

注) *¹philologist : 西洋古典学者

問 1 下線部アを日本語に訳しなさい。

問 2 バンダ(Benda)の考える知識人の定義とはどのようなもので、その知識人は何を信奉しているのか。100字以内の日本語で説明しなさい。

問 3 空欄

A

 には、次の意味の英文が入る。空欄に入る適切な英文を書きなさい。

今日の広報の専門家はグラムシによれば有機的知識人であると考え得るのだ。彼らは潜在的顧客の同意を得たり、消費者や有権者の意見を取りまとめようとしたりするのである。